

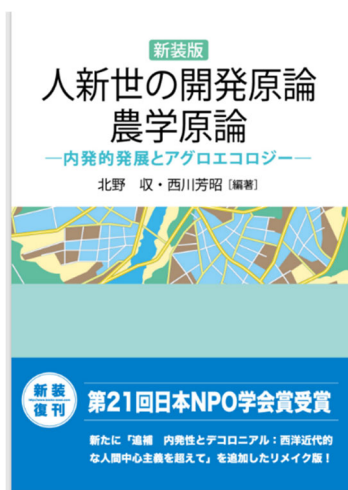
龍谷大学経済学会・国際開発学会「アグロエコロジーと食農システム」

研究部会合同研究会

『人新世の開発原論・農学原論 内発的发展とアグロエコロジー』合評会

日時：2025年3月4日（火） 14:00 ~ 17:30

場所：龍谷大学深草キャンパス和顔館 B-108 教室＋オンライン（zoom）配信予定



報告者：

北野収（獨協大学）：私たちの脱植民化と小さな農的連帯 ―開発原論の視点からアグロエコロジーを捉える―

西川芳昭（龍谷大学）：天地有情の思想と生命誌論 ―農学原論の視点からアグロエコロジーを捉える―

討論者：

池上甲一（近畿大学）：国家農学と民間農学の視点から考える

古沢広祐（國學院大学）：発展とは何か？人類史（人新世）の視点から

開催趣旨（参加への招き）：『人新世の開発原論・農学原論 内発的发展とアグロエコロジー』（2022年初版：2024年新装版発刊）は、国際開発学の展開や農業の思想の発展の世界の事例を紡いで、新しい原論を築く試みであった。初版出版以来2年余りの間に多くの学会誌書評で取り上げられ、2023年日本NPO学会賞を受賞した。協同組合学会（古沢広祐）では広義の社会的連帯経済を視野に入れた動き・特に「市井の人の横のつながり」の描写に注目し、共生システム学会（植木美希）では、「開発原論・農学原論の書ではあるが、ダイバーシティと共生そして時空を超えた命のつながりの著作と位置づけることもできる」と評された。有機農業学会では前会長の谷口吉光が、「複線の発展論、脱植民地主義、住民主体論、人間主義、地域主義などの要素を含んでいる内発的发展論を新しい開発原論の基盤として選んだ」・「生命誌の視点で内発的发展論と天地有情の農学をつなぐことを提唱し、社会科学と農学と生命科学という通常は別々の学問だと思われる諸科学をつないだ」と紹介した。北野と西川は「内発的发展、アグロエコロジーを問うということは、人間と自然、人間同士の関係性のなかで、人間の存在論を考えることに帰結する」「多様な人々にとっての命の尊厳と連帯の追求こそが開発原論（発展・展開）であり、自然と人間にとっての協創的な支え合いの追求こそが農学原論ではないか」と問いかける。この問いかけに、中村尚司・河村能夫・大林稔らが実践してきた龍谷大学経済学部民際学研究所の歴史も参照しつつ、「農学原論」（京都大学）講座出身の二名による歴史的視点と国際的状況を踏まえたコメントを基に、国際開発学会「アグロエコロジーと食農システム」研究部会メンバーを中心とした討論を行いたい。

参加問い合わせ：龍谷大学経済学会関係者は、西川芳昭（nishikawa@econ.ryukoku.ac.jp）（龍谷大学経済学部）

国際開発学会関係者は、牧田りえ（ethicalagrifood@gmail.com）（部会副代表・学習院大学）まで

参加費：無料、書籍購入を希望する場合は著者割引で販売します（2,200円税込み）